

氏名	窪井 裕美
ヨミガナ	クボイ ヒロミ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第471号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 祈りの庭 〈作品〉 祈りの庭

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	手塚 雄二
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	吉村 誠司
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	梅原 幸雄

（論文内容の要旨）

人は皆、それぞれの生活環境や人間関係において、様々な感情の下で日々を過ごしている。それは他人への愛情や優しさ、自然やものを愛でるなどといった慈しみの行為から、悲しみ、怒り、あるいは憎しみといった負の感情まで様々である。本論では、人間が誰しももつ善の要素と負の要素を、「祈り」と「毒」という観点から考察し、この二つの要素はどちらも魅力的な表裏一体の要素でありうる事、さらに幼少期から自身に密接であった「庭」にそれを関連付けることで、自身の絵画制作の過程を考察した。

私は、仏教を信仰する両親のもとに生まれた。物心がついたときから仏教に密接にかかわり合ってきた私は、それに逆らうかのように、「祈る」という行為を軽蔑あるいは軽視していた。一方、寺院や教会に足を踏み入れたときに感じる厳かな雰囲気や、宗教絵画や彫刻、聖歌といった芸術的観点からは、どこか懐かしくもあり安らぐ様な印象を抱いていた。

その一方で、幼少期の閉じた世界から、負の要素も今日の私を形作っているものとして切り離せないものとする。善の要素は負の要素と表裏一体であり、本論では負の要素を「毒」として表現している。本論での「毒」とは、＝“死”に限定する事ではなく、人間が必ずもつ業、悩み、悲しみ、怒りといった、負の側面のことを指す。私は、人間しか持たないこれら全ての感情を、どちらも尊く美しいと感じる。

また、「祈り」「毒」といった人間の感情をテーマに描く私にとって、その背景には「庭」があった。ここでの「庭」には、幼少期の遊び場だった庭だけではなく、かつて過ごした家や故郷である小さな街も、「庭」に相通ずるものがあると考えられる。仕切りで囲まれた「庭」は、一つの宇宙のような神秘的なものを秘めているように感じる。西洋の宗教神話だけでなく、陰陽五行や四大元素説、密教の曼荼羅、日本庭園の枯山水にもこの思想が当てはまる。よって「庭」は、私の考察する「祈り」を形成するうえで、重要な繋がりを見出せるのではないかと考えている。「祈り」を込めて描いた作品の方が、祈らずに描いた作品よりも、遙かにこの世界と絵画とを繋ぐ役割を果たしているからである。

「祈り」と「毒」は、互いが存在するがゆえに成り立っており、私はそれを、「庭」を母胎に絵画化しようとしている。そのプロセスを、本論では以下の4章から考察した。

## 第1章 祈りと毒

第1節「祈りに対する認識」では、現代の日本では人々が「祈る」という行為を軽蔑あるいは軽視してきていること、しかし、「祈り」という行為は、誰もが行う行為であることを述べた。

第2節「故郷の記憶」では、自らが「祈り」という世界に最も近い環境にありながら、「教え」というものへの反撥心を抱いたことや、幼少期のトラウマから「祈る」ことへの関心や思考が大きく変わった経緯を述

べた。

第3節「共存の心理」では、私の考える「祈り」と「願い」の違いや「祈り」と「毒」について、さらに仏教の教えのひとつである「三毒」についての見解を述べた。

## 第2章 庭へのアイデンティティ

第1節「私的観点から見る庭」では、幼少期の多くを過ごした自宅の「庭」から、「庭」というモチーフに興味を持った経緯を述べた。

第2節「神話的観点から見る庭」では、呼び方によって違う「庭」の定義と、密教曼荼羅の宇宙観を比較し考察した。

第3節「西洋、東洋から見る庭」では、日本庭園の代表である枯山水、陰陽五行や四大元素説、曼荼羅の宇宙観から、「庭」＝「母胎」と考える理由を考察した。さらに私の絵画制作に視覚的モチーフとして取り入れている、コテージガーデンについて述べた。

## 第3章 花と色と女性像

第1節「色彩、技法によるノスタルジア」では、「祈り」と「毒」それぞれの意味をもつ草花やモチーフを「庭」の中に混同させ、さらにベージュやグレートーン、セピアといった色彩を結びつけることにより、自分なりの世界観を表現しようと試みた自身の作品について解説した。

第2節「自己投影としての女性像」では、私がこれまで人物、特に女性を多く描いてきたことについてを、その理由と心理的な要因、さらに男性と女性が描く女性の違いについて触れた。

第3節「ノスタルジーとしての女性像」では、私の作品が影響を受けたジョン・エヴァレット・ミレイやウォーターハウスといったラファエロ前派の作品、西洋の土産物屋等で売っているカルト・ド・ヴィジットの写真、アウトサイダーアートのヘンリー・ダーガーの作品などを挙げ、その作品群の「祈り」「毒」「庭」からなる女性像を考察した。

## 第4章 提出作品

私の「母胎」である「庭」に、私の考える「祈り」「毒」をどのように配し、提出作品を作り上げたのか。その具体的な技法と経緯を述べた。

### (論文審査結果の要旨)

本論文は、仏教への信仰の厚い家庭に育ち、病弱だった幼少期に遊んだ様々な感情が凝縮された庭をイメージの舞台に、日本画を制作する筆者の創作論を論述したものである。

情報化社会、記憶、認識などをテーマとする論考が多い近年の傾向の中で、祈りをテーマとした論文は珍しいが、本論文も信仰心の吐露というより、宗教色の濃い環境に育った筆者の記憶、認識、そこからの創作論として捉えるべき論述内容になっている。そもそも筆者の中での宗教の記憶は、祈っても一向に病状が改善しない正負の感情が混在したものとしてあり、幼少期の閉じた世界（「庭」）も同様に、正負の感情が一体となった記憶として現在に続いているようだ。筆者が絵に込めようとしているのも、その両者である。

第1章では、正負、善悪のその両者を、「祈り」と「毒」として論じている。ここでの「毒」は、ポイズンではなく、仏教でいう「三毒」（貪・瞋・癡）の「毒」、つまり貪欲や不満、怒りなどの負の感情を指している。第2章では、「庭」を仕切りで区切られた様々な領域として捉え、幼少時に遊んだ自宅の庭、宗教的な曼荼羅の宇宙観、イングリッシュガーデンや枯山水といった東西の庭の具体例について述べる。筆者が制作で描く庭の具体的イメージとしては、イングリッシュガーデンのルーツとなったコテージガーデンが最も近いという。そして第3章では、第1章の「祈り」、第2章の「庭」を受けて、実際にその状況に描くのが女性像であることの理由について述べる。端的に言えば、自己投影と共感しやすいのが女性像だからということだが、グレーやベージュのハーフトーンの色相を多用しているのも、「ノスタルジーとしての女性像」を表すためとする。第4章では、いずれも「祈りの庭」という同タイトルの提出作品3点について解説している。

全体としてよくまとまった論文になっている。ただまだ何か重要なことが書かれていない読後感も、若干残る。その点で気になるのは、筆者が影響を受けた女性像として「ノスタルジーとしての女性像」（第3章第3節）であげているのが、むしろ「毒」から成る女性像であることだ。ここで筆者はラファエル前派の「オ

フィーリア」と並んで、カルト・ド・ヴィジットの写真、アウトサイダーアートのヘンリー・ダーガーなどをあげている。深く言及されてはいないが、これが筆者の深層部に絡むようにも見え、それゆえの「祈りの庭」なのかもしれない。

文章は読みやすく、構成もしっかりとしたものになっている。学位論文として十分なものとして、審査会の承認を得た。

#### (作品審査結果の要旨)

窪井さんは学部頃から人物を中心とした詩情的で物語的な絵を描いていた。

少女を中心に草木等の自然な風景との組み合わせが多く、オーソドックスな構成である。ただ、風景の表現に彼女独自の解釈をした箇所があり、背景の表現にいいものがあった。卒業制作では、人物を構成し甘さから脱却しようとしている様に感じられた。

修士・博士と制作するにあたって、人物の表現がただ甘いだけの少女から、何か人に訴えかける人物（少女）へと変わってきた。詩情優先ではあるが、割り切れない感情によって、人物に魂が宿った。モチーフや狙い等にあまり変化はないが、以前に比べ、深い色合いと塗り絵を超えた表現により作画に悩み苦しんでいる様子がかがわれ、新たな展開に向かって一歩先に進もうとしている。

作品の感想であるが、

「祈りの庭・150号」・自然への感謝をテーマとした作品で彼女の心の思いが伝わってくる作品である。オーソドックスな技法で、奇をてらっていないからこそ出せる味わいと雰囲気があり、造形性も感じる作品である。真摯に画面に立ち向かい120%の力を出して制作した結果、やや泥臭くなった感もあるが、彼女自身の心と深い空気感を表す事に成功している。「祈りの庭」と題した作品は他にもあるが、彼女の気持ちを画面にぶつけていく姿勢がよく出ている。

「花摘み」・(祈りの庭)と同じような表現ではあるが、人物を中心としたまわりの構成は他の作品と異なっていて、創作的で彼女自身の自由な表現を感じることができる。まだ、未完成なところもあるが、絵画的に深く表現されている。

「祈りの夜」・彼女の作品の中で一番切れがよく、表現・マチエールが小気味よく見やすい画面となっている。抒情的なお話ではなく、絵画として気持ちを表現できた。一枚だと思う。

「毒と祈り」という論文を読み、彼女の心の内を知り、幼少の頃からの庭への思いを知ることとなった。学部の頃、人物画の背景に魅力を感じたのは、庭という世界に思いがあった為であろう。彼女の庭への思いと人に対する揺れ動く感情により、学部の頃の背景（自然の風景）への思い、人への思いが現在の絵画表現として結びついてきている。ただ、彼女の特別な思いは言葉で聞かなければ納得し深く理解する事が出来ない。作家にとっては特別な感情でも他人には通り一遍で、絵画表現としてはよくある世界になっていることが多い。絵画は、お話ではなく、感覚で受け止め、一瞬でわかる世界である。いろいろ説明されてわかるものではない。この感覚を磨いていくことがこれからの課題であろう。その為に、内面的なことが相手に伝わっていくような構成や表現方法（技法）の向上が大切であると思う。作家とは他の人にできないもの・新しいものを目指して努力精進していくこと。努力家で画面に対して誠実で真摯な態度で描いてきた行為は、これからの作家活動に必ず生きてゆくと思う。

#### (総合審査結果の要旨)

作家としての才能は、何でもない平凡な日々の中から生まれて来ることは難しい。平凡な日々の中に非凡なものを感じる感性こそが大切であるとすれば、窪井裕美さんは、幼少の日々の中に心に刻み込まれた感情によって、他者と異なる独自の視点を培い、また、作家としての原点をそこに見出してきたのではないだろうか。

学部、修士を通じて人物を主たるモチーフとする彼女は、博士課程において、人間が感情の中に持つ善の要素と負の要素に主眼を置いて創作研究を行ってきた。博士論文「祈りの庭」において、それらの要素は「祈り」と「毒」という二つのキーワードに表される。幼少の頃から、尊く美しいとされる信仰心、すなわち「祈り」に反目しながらも密接に関わりあってきた彼女にとって、人間の持つ業、悩み、悲しみ、怒りといった負の側面もまた、感情の上で切り離すことの出来ない表裏一体の要素であった。そうした要素を、彼女は独自の観点から「毒」と表現する。

作品においても、それら二つの要素が、言うに言われぬ情感を孕みながら表現されているように感じる。例えば、彼女の作品に表される柔らかなグレートーンやセピアの諧調、そしてその中に交じり合う金属顔料の色味。それは懐かしい幼少期の記憶を背景とした温もりを含みつつも、どこか陰りを感じる。それは、予定調和に美化することの出来ない過去の閉塞感や孤独、不安といった負の要素が、画面に暗い陰を与えるのだろう。しかし作品として観ると、彼女の表す「毒」は効果的な表現として現れる。ともすれば甘ったるくなりがちな作品全体の雰囲気、彼女の「毒」はまるで時代を経た古画の色調のごとく、わびさびにも通じる心地良い落ち着きを与える。作品としての力強さに欠けるきらいがあるものの、観る者にあからさまな刺激や嫌悪感を与える毒々しさとは異なり、彼女の「毒」は甘さの中に投じられたスパイスのような役割を果たす。それは、彼女独自の優れた美的感覚の妙によって表現されたものであり、今後の制作活動において大きな武器となるだろう。

今後の展望として、作品あるいは作品に描かれたモチーフを解釈する上で、普遍的な知識や理屈に寄る事なく、自ら理屈を創造し表現する作家となる事を目指してほしい。当たり前の物やあらかじめ用意された正解を説明するのではなく、時にはあえて不正解という解釈を提示し、社会に一石を投じる事が出来るのが作家であるならば、彼女には、何かの引用ではないオリジナルの物語を紡ぎ出し、より深みある表現世界の作り手となることを大いに期待したい。

彼女の論述ならびに作品は、これまでの創作研究の成果として評価に値し、またこの先の作家としての展望を期待させるものである。審査員全員の協議の結果、博士論文ならびに研究作品は学位研究に相応しいと判断する。